

沖縄県でも唯一、村単位で確立されているへき地研究会である。国頭村内へき地5校が学校経営、授業経営で「学びの共同体」という1つの理念でつながり、日常の授業改善や学校運営に研究を深めている。右写真は本年度担当校安波小学校長新垣進校長先生である。以下新垣校長あいさつ文より抜粋。



国頭村では、国頭中学校を拠点校とし全小中学校で「学びの協同体」の理念に基づく授業づくりが推進されています。

本校においても校内研修のテーマを、『一人一人の学びを大切に、仲間と学び合う授業づくり』。～少人数、複式学級における指導の工夫をとして～と設定し、日々の授業研究に取り組んできました。今年度は特に、国語科における「読むこと」を中心に、子どものひとり一人の学びの視点(対話と協同)で、互いの考えを交流し合うことにより「学びの深まり」のある授業づくりや教師自身の研修の深まりを推進してまいりました。・・・お話を想像し(描き)、登場人物と向き合い、自分の思いや考えを深め、互いの思いを伝え合い、訊き合う、味わう国語の「読み」を目指し・・・。

少人数、複式学級における「学びの共同体」の理念による授業実践は試行錯誤の中にあり、ジャンプ課題の設定を始め多くの課題を抱えています。長期的な視野を持ち職員同士の同僚性を高め合う環境を整え、日々の授業を大切にし、教師同士のゆったりとした研修を進める中で教師の授業力の向上に努めてまいります。

(新垣進校長 あいさつ文より)

5校時 全教室授業公開

《児童の名前はすべて仮名》

《1・2年 男子1名、女子5名》「わにの おじいさんの たからもの」

この教室を2年間観続けてきた。実にしっとり、子ども達の安心しきった表情にいつも私が癒される。4月から転入してきた男の子も、何の違和感もなく、語れるようになってきた。困った時は絶対みんなで支え合う。決して孤立させない。教師と教室の仲間が作り出す素敵な空気と息づかいが教室を流れる。



「あのよ」ってなに?子どもの口から、何の遠慮もなく「わからない」が出てきた。右の写真は「あのよ」について語るペアである。女の子が語る「天国」じゃない。だって、地獄はこわいもん。」男の子が「天国って何?」みんな必死に語る。



《3・4年 男子2名、》「ごんぎつね」 (6)の場面



児童二人の学びである。「読み」は多くの他者の多様な読みによって深めたり、広めたりできる。しかし、現実には二人である。教師は子ども達にとって第3の仲間も演出しなくてはならない。これが現実である。・・・これまでを振り返りながら語る。

翔太:「ごんは 自分がうなぎを取ってしまったから兵十のお母さんが死んだと思っている。」

良人:「ごんは 自分が殺してしまったと後悔している。」

授業者が一人の仲間になってテーマ(疑問)を下ろす。

「ごんは 殺されても しあわせにおもったんじゃないかな～」

「なんで～」・・・語る、語る、二人の学びが永遠に深まる。

《6年 男子1名、女子1名》「きつねの窓」 (1)の場面

安波小に5年生はいない。1年の頃からずっと二人である。「いいも、わるいも」「できるも、できないも」互いにすべて知り尽くされている。校内では、かわいい後輩たちの先輩として日常から面倒を見なくてはならない。人的環境、物的環境が一般の「あたりまえ」とはちがう、これがへき地校である。

6年生の二人も当然差はあるが、「学び」には全く違和感を感じない、それぞれの感性や思いは最大限に



尊重されている。対話の言葉もいつも柔らかさを感じる。実に素敵な関係である。

授業者の発問

: キツネの窓って何?

: 何を写すの? なぜそれが映るの?

: あなたたちの窓には何が見える?

若菜: 手をかざし見つめる。

隆道: 会いたい人の心がうつる?



《全大会会場（体育館）》 写真では紹介しきれないほどの4月から本日に至るまでの資料が掲示されている。授業風景や学校行事などである。どの資料、どの写真を見ても学校は子ども達のためのものであり、地域や保護者みんなのよりどころであることがひしひしと伝わる。あくまで中心は子ども達である。ゆるがない信念が写真から見えてくる。「人は支え合って生きている。」が必然のへき地である。



☆ 「保護者の手づくりで参加者をもてなす。」この事実を自慢できる校長先生は幸せ者である。

《研究報告》 研究主任 N 先生

今日の報告会に向け、1年間積み上げたものがある。右の写真もそうである。安波小のすべての先生方が「今日に向けて」頑張ってきた。これまでを淡々と研究主任が語る。みんな静かに聴き入る。今日という本番を迎えるにあたって、教師が互いに支え合い学び合ってきた。

安波小の同僚性の高さは、これまでも何度も見てきた。一番に幸せ者は校長であり、教師たちの同僚性の恩恵を受けるのは、



まさに天使のような子ども達である。…それでいい。本日も目に見える鮮やかで素敵な発表会であるが、それ以上に本日に至るまでのプロセスの中で積み上げられてきた会場では見えない教師達、子ども達の成長を大切にしたい。結論、この教師集団だから「このような子どもたちが育つ」



《全体協議会》

国頭村のへき地教育について「語る」会である。不思議なことに、田舎の純粋で無垢な子ども達を相手にしている先生方も、なぜかその地域や子ども達の色に染められてしまうのである。研究会も、日々の集合学習や交流学习でのつながりで、よく分かり合っている教師達である。本日の授業も実にしっとりである。子ども達が学び合、参観する教師たちも身構えることなく、謙虚に子ども達と授業者に柔らかな視線を注ぐ。

豊かな自然とさわやかな風、ゆったりした空間の中で子ども達も、大人たちも互いに真実の自分をさらけ出す。本音で語ろう。「見せたい自分」ではなく「聴いてほしい自分」を分かってもらおう。

グループ協議で語らない者は一人もいない、理念やビジョンが浸透しつつあることを実感する。感謝に尽きる。



《教育長激励の言葉》



教育長：小橋川春武

教育長も自らが現在へき地である佐手区の出身である。数年前には佐手小学校に校長として在任していた経験もある。

へき地教育への熱い思いは一言では語れない。本日もへき地教育に邁進する教師たちにエールを送る。「へき地教育にこそ『真』の教育がある。真心の教育がある。」

参加者も静かに心かたむける。穏やかな空気が会場を包む。

安波小学校の職員の皆様お疲れ様です。感謝に尽きます。

校長、教頭、養護教諭、用務員、事務職員、教諭3名 計8名。児童10名。どれほどのエネルギーを費やしただろうか。大勢の参加者に敬意を表した心温まる迎えに頭が下がる思いを募らせました。

みんなで創る、みんなで支える、職員も子ども達も、そして地域のみんなで。「学び」の授業においても、特に国語の文学教材の研究は圧巻です。今後も、村内のモデルとしてさらなる研究の深まりに期待します。

右の写真、本番まえの給食の準備風景です。どう思われます。



国頭学びの会ゆい